

詩壇自他のこと

西谷勢之介

十餘日の如し、この言葉は私にさう
しいやうである。友、伊藤新隆輝は「詩文學」
において、

「大正の詩壇は篤学の詩人西谷勢之介を尊ん
ぶ。この貴を尊ぶべきは將して誰か」
と述べたことがある。おそれ、然として
心叫んでくだらぬものがあり、それが、
と、この詩壇の恥がなく、はな
ものかあつて、其のころ、私
自身を恨殺し、たのがある。若笑し、たのがある
。忘れておた、詩壇に呼びかけ、
自身を省み、たのがある。何となく寂しい気がし
た。おた、た。と、たのがある。
物、詩のやうな、たのがある。詩壇に投ずるこ
とが出来ない。物は、たのがある。詩のたのがある。申